

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第109号(通巻第169号)
2013年10月3日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山3-9 東永山複
合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は常駐
していません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL <http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp>

江戸の形跡を覗く「東京川ウォッチング」(上)



ガイドが二人ついて名調子で案内する

ガイドが二人ついて名調子で案内する。リリー以外は、まさに“江戸の追っかけ”のようなもので、川から見上げる橋や石垣などが遠い歴史をよみがえらせてくれる。

9月29日のよく晴れた日にこの船旅(約2時間10分)に参加することができたので、その乗船報告を行おう。

集合は浅草橋の神田川沿い。ここにある船宿から乗船するのだが、いままで屋形船だけだった船宿が、この新しいタイプのツアーに合わせて昨年7月、外がよく見える構造の50人乗りの観光船を新造したのだそう。小回りがきき、低い橋の下でもくぐれるように、全高が低い設計になっているのが特徴。



江戸時代からの石垣がそのまま残る

江戸時代からの石垣がそのまま残る。午前9時40分、船は満員の客を乗せて出発。最初は万世橋、お茶の水、水道橋と中央線に沿ってのぼり、飯田橋で左側に鋭角に曲がり、日本橋川に入る。現在の神田川は浅草橋の先で隅田川に合流しているが、この飯田橋からのほぼ直線の川筋は、徳川幕府によって山だったこのへん一帯を掘削して人工的につくられたもの。外堀の延長と、江戸各地に清良な水を供給するためだった。

仙台藩の伊達家がこの工事を命じられて行ったもので、お茶の水あたりの深い堀は以前は「仙台堀」と呼ばれていた。また駿河台からは土中を木管で水を通して運んだり、小石川から神田上水を通水させた。



日本橋川に入ると、川は高速道路の支柱だらけ。船は支柱のあいだを縫うようにして進む。俎(まないた)橋という変わった名前

←日本橋を川面から見上げる

の橋があるが、これは幕府の台所を司る役人町、神田御台所町の近くにあったことからこの名がついた。反りがなく平らで、確かにまな板のよう。隅田川に出て最初の風景上を通るのは靖国通りだから九段下のなじみの橋だ。



その先の右側には、江戸時代の名残の石組みがそのまま護岸として残っている。よく見ると、石にはいろいろなマークが彫られている。これは「打ち込みハギ」といって天下普請の際、他家の石と区別するために、石工が彫った印といわれている。一ツ橋家の御門の石垣も、現在もそのまま川の護岸として残っている。

さて、上を高速道路でふさがれたと不評の日本橋に到着。ここでは、以前から続けられている川の浄化のための「EM菌」をだんご状にしたものを、希望者が川に投げ入れる。EM菌は生ごみのたい肥化にも使われているので、ご存知の方も多いただろう。これらの活動のお陰で近年、川の水質はかなり改善されたとか。

日本橋川は、白く塗られた豊海橋をくぐると、隅田川に合流する。出たとたんびっくりするのはリバーフロントに建てられた超高層マンションの多さ。川幅も広く波まで立っている。また、行きかう観光船、水上バイクなど、水上が急ににぎやかになった。

船は小名木川に向かう。この川は千葉の行徳方面の塩田から塩を江戸に運ぶため、人工的につくられた運河。しかし、この流域部が昭和初期まで工業地帯として地下水の汲み上げや天然ガスの大量利用を行っていたため、地盤沈下が起こり、小名木川の水位が下がってしまった。つまり、隅田川や近くの運河から小名木川に向かって、東の地域に水が流れていってしまうわけだ。



扇橋閘門で後方の水門が下がるシーン

このため東京都は昭和40年代に地下水の汲み上げを全面禁止にするとともに、扇橋閘門という水門をつくり、小名木川東部への水の流れを遮断した。そして、船が通るときは両水門のあいだに船を入れ、パナマ運河のように2.2mの水を抜いて水位を下げたり、逆に水位を上げて双方向に行けるように調整している。今回、ここを往復する航行を体験した。(次号につづく)

多摩川源流キャンプの報告会開催

8月2～4日に開催された多摩川源流体験サマーキャンプの報告会が9月21日午後、落合2丁目のグリーンライブセンターで開かれた。会場には7家族19人の親子連れが参加。スタッフも5人が参加し、キャンプで記録した写真をスライドショーで楽しみながら、もう一度夏の思い出にひたった。親は現地の子どもの姿を見るのは初めてなので喜んでた。また、主催の多摩市水辺の楽校で制作したイベントの報告書も参加した家族に配られた。(→報告会)



盛況！“エレキセンター”のエネカフェ



多摩循環型エネルギー協会が毎月第一土曜日に開いている「エネカフェ」が10月5日に永山ハウス（諏訪1丁目）の集会室でカフェの

会場には20人近い人が開かれ、多摩の各地域からエネルギーの今後に関心をもつ20人近い若い人が参集し、熱心に聞き入るなど盛況だった。

最初が多摩エネ協理事の片桐徹也さんが、来年に一般財団法人設立をめざして取り組む「多摩地域創造基金」というものの構想について話した。これは多摩地域が今後発展するのにいろいろな好条件を備えているので、地域をさらに創造するための基金をつくらうというもの。



2番目は9月下旬に京都・龍谷大学で開かれた「市民・地域共同発電所全国フォーラム」に参加し、

林理事のフォーラム参加報告 分科会で事例報告を行った林久美子理事の参加報告。

3番目は奥多摩で小水力発電の実証実験を行っている濱田幸一さん（エネ協会会員）の映像紹介。これは半円形の鉄製の筒に螺旋形のプロペラのようなものの軸を固定して設置し、斜め上から水を流すとプロペラがよく回転し、その力で発電するというアイデア機。10月26日に青梅線の鳩ノ巣駅近くで一般公開を行うとのこと。

また、日野市でも市民発電所の計画が持ち上がっているなど、この日は青梅、八王子、日野からの参加者があり、情報交換を行った。これも、三多摩では多摩エネ協が市民発電所を先駆けて実現したことから、センターのような存在になっている証なのかもしれない。

「生ごみ入れません！袋」最初の配布に80人



ごみ対策課が市民に対して行う「生ごみ入れません！袋」の今年度後期分の配布が、10月6日午後のひじり館から始まった。すでに生ごみを自家処

理している人の更新と、これからそれをしようと申し込む人の両方が対象。午後1時からひじり館ホールで磯貝浩二担当課長による「ごみは資源」の講演も行われたが、午後3時30分から5時30分までのあいだ、申請が受け付けられた。

無料で「燃やせるごみ」が出せる同袋の人気は高く、会場前には時間前から15人～20人の列ができていた。同課長やごみ減量担当職員、生ごみリサイクルサポーターら4人が対応に当たったが、ひっきりなしに更新や申し込みにくる市民に休みなしで対応。10リットルの袋20枚が渡されるのだが、関心が高く全部で80人が登録した。

国と東電、放射能と闘うことを決意した“ベコ屋”(2)

3月18日、東京電力の本社前に行くと、相変わらず警備は厳重だったが、警備員に「自分は福島から来た。こ

のままでは牛が全滅してしまう」というなり、自分は感極まって泣きじゃくり始めた。その姿を見た警備員が「憐れみ」を感じたのか「福島」の牛を世話する吉沢さん効力か、社内に取り次いでくれた。けっきょく東電の門は開かれ、なかの応接室に通された。



総務部の主任という人が出てきて対話をした。「たぶん牛は全部死ぬだろう。絶対に損害賠償の訴訟は起こす。東電は原発をコントロールできなくて逃げようとしているようだが、絶対に逃げるな。あんたたちがつくった原発じゃないか。自衛隊の人たちだってあれだけがんばっているのに、ふざけるな。オレだったらホースを持って建屋に飛び込んでいくぞ」と。

最後のころ、総務氏はむせび泣いていた。こうして、自分の思いは東電に伝わったと思った。

つぎに農林水産省に行き、「国として牛たちを生きさせる手立てを考えてほしい」と懇願し、農水省も一度は牛の移動を考えていたことがわかった。経済産業省内の原子力保安院にも行った。「国が安全といていた原発が爆発した。オレは3号機の爆発音を聞いた。プルトニウムが福島に飛び散っている。あなたたちのやっていることは『危険不安院』じゃないか。ふざけるな」といった。

もう一つ、当時の枝野幸男官房長官がよく「原発の事象」という評論家のような言葉を使い発言していた。まるで自分には責任がないような顔をして。これも許せなかったもので、枝野長官と面会し話をしたかった。

警備の厳重な首相官邸前で面会を申し込むと、これも警官が親切に取り次いでくれたのだが、返ってきた返事は「アポなしではだめだ。後日出直してこい」だった。

「事象」がなんなんだって。責任を感じろよ。

1週間後、二本松の社長の家に帰った。牛たちが全滅するのは目に見えていたので、3月18日に社長自身が泣きながら牛舎の門をあけたそうだ。餓死だけはさせたくない。そして3月23日からもやし工場の搾りかすをもらい、トラックでそれを牛舎に運んだ。放射線量が高いから、さっと置いてさっと帰るといような方法で。

近所の農家の牛舎も見て回った。停電で水は出ない。世話する人もいない。エサもない。牛たちがつながれたまま死んでいく地獄のような光景を、あちこちの牛舎で泣きながら見た。これによって「こんなことをしていいのだろうか！」と逆のスイッチが入った。

とにかく牛たちを生かすんだ。原発から20km圏内。早期警戒区域ということで、道路は全部封鎖されていた。

「許可証のない者は逮捕するぞ」「罰金は10万円」ということだった。といっても許可証は出してくれないので、警官の詰めていない山のなかのルートを使って牧場にエサを届けていた。しかし、パトロールの警官に見つかって署まで連行され、始末書を書かされたこともあった。

でも、オレたちは牛を見捨てないよと、エサ運びを続けた。その行動が宮城県の「河北新報」紙に大きな記事で報道された。そしてそれが枝野さんにも伝わった。彼はNHKのニュースで「警戒区域にしたのに農家でエサを運んでいる者がいる。よくない」と。（次号につづく）